2008/04/13

アンチ・吉本隆明論　「詩とはなにか　世界を凍らせる言葉」について

1

　吉本隆明は己の日常を振り返り、「慣習的な精神への苦痛」を見出している。彼にとっては「詩にほんとのことを吐き出すというのは現実上の抑圧を、詩をかくことで観念的に一時的に解消することを意味している」。
「詩とはなにか。それは、現実の社会で口に出せば全世界を凍らせるかもしれないほんとのことを、かくという行為で口に出すことである。」
　「詩とは何か」という問いには、様々なレヴェルがあるのだ、ということにいよいよ思いを致さざるをえない。
　吉本隆明のこの問いと答えとは、彼の生活経験の上では、詩を書くということがどんな意味を持っていたかについて、ごく個人的に自問し、それに彼自身が私的な言葉で解答を与えたというに過ぎない。それ自体には、どんな冷めた自意識も、繊細な観察眼も働いてはいないのである。
　「世界を凍らせる言葉」という言い回しは彼自身の詩作品から取られたもののようだが、それだけに印象的な言い方である。けれどもそこに何か重要な真実が隠されているわけではない。というよりも寧ろ、隠された真実という幻想への信仰心が吉本隆明にこの詩句を言わしめ、同じものへの執拗な信仰心がこの詩句を支持してきたのだと私は考える。
　しかし問題は、この問い掛けの無造作な設定の仕方が、詩論全体に大きな影響を及ぼしている点だ。詩を、生活感情と直接的に結びつけるとき、生活感情の昇華である生活思想との接点はすぐ目と鼻の先なのである。寧ろこう読むべきであろう。吉本隆明は、そもそも詩を個人の生活思想の表現と考えていたから、問題の建て方もその答えを導きやすく建てたのだ、と。

2

　吉本隆明は三人の詩人、文学者、哲学者の言葉を引用する。まず萩原朔太郎をどのように読むかを見てみたい。
『夢とは何だろうか？　夢とは「現在(ザイン)しないもの」へのあこがれであり、理知の因果によって法則されない、自由な世界への飛翔である。故に夢の世界は悟性の先験的範疇に属してないで、それとはちがった自由の理法、即ち「感性の意味」に属している。そして詩が本質する精神は、この感情の意味によって訴えられたる、現在(ザイン)しないものへの憧憬である。されば此処に至って、始めて詩の何物たるかが分明して来た。詩とは何ぞや？　詩とは実に主観的態度によって認識されたる、宇宙の一切の存在である。もし生活にイデヤを有し、かつ感情に於て世界を見れば、何物にもあれ、詩を感じさせない対象は一もない。逆にまた、かかる主観的精神に触れてくるすべてのものは、何物にもあれ、それ自体に於ての詩である。』[「詩の原理」]
　吉本隆明は、これに触れて、
『朔太郎の原論で、「そして詩が本質する精神は、この感情の意味によって訴えられたる、現在(ザイン)しないものへの憧憬である。」という個処は、あきらかにわたしの詩の動機と接触する。「現在しないものへの憧憬」というものを「現在しえないものへの憧憬」とでもいい直せば、一致さえするようにみえる。』と読む。

朔太郎は、詩が現実と人間とが接するところで、奇妙な断層を作り出すことに気がついていた。彼はここで、詩が自由に飛翔するかのように作り出す世界が、朔太郎自身にとって先験的と感じられる、安定した言語の世界と比べて、あまりにも奔放で、不一致である様を見つめているのである。

3

言語の世界とその論理は、人々と共有され、その共有の事実により保証され、安定的である。その存在は自分に先立っていて、自分はそこへ安心して参加してゆくばかりに準備された世界なのである。

ところが、詩の経験は、そこへ素直に入ってゆこうとしない。それは夢のように現実の論理や整合性を逃れ去ってゆこうとする。夢と違っているのは、夢が現実生活の中で練り上げられた欲動を背景としている点だ。詩は、現実的な欲動とも無関係に、存在しないもの、つまり人々との間で共有された現実世界の外へと、あるいは言語の範疇から逃れるように突き進もうとする。しかし、わたし自身の感性は決して眠っているわけではないから、そこで働いているのは「感性の意味」であるに違いない、そう考えた。

感性は働き、世界を受け止めている。その経験の中では、人々と共有されている論理的整合性や言語の規則などは寧ろ後退しているのだ。この経験は、徹底して主観的な経験なのだ。主観的な感性が見出した宇宙が、私の欲動の対象なのである。何かがある、そのことが私の欲動の契機となり、その都度新たに「現在しないものへの憧憬」を、生み出し続けるのである。

私はこのように読んだ。だから吉本隆明が朔太郎の「そして詩が本質する精神は、この感情の意味によって訴えられたる、現在(ザイン)しないものへの憧憬である。」という一節を読み誤っているのは明らかだ、と感じる。吉本隆明はここに、現実生活に対する違和感を読み取り、己の主観的理解を補強する議論を嗅ぎ取った。[朔太郎は、そうではなくて、詩的体験を見つめているように見える。]

「感情の意味によって訴えられたる」を「生活感情の」と読み換え、その直前の「感性の意味」という言葉を無視している。また、「現在しない」を「現在しえない」とほとんど盲目的に読み換えてしまっている。そのように読めば、この部分が生活感情出自の言葉と理解できるからだ。つまり、「しえない」は「してほしい」という感情抜きには出てこない言い回しなのである。しかし一方の「現在しない」は、本質的に言語化された世界と無縁である、という意味なのである。

これは解釈などというものではない。正義を振りかざした思想的侵略のようなものだ。なぜ落ち着いて読まなかったろうか。なぜ伝統化を強力に拒むような読み方をしたのだろうか。

4

次に中村光夫「小説入門」が引用されている。

「詩の場合は作者の思想や感情は言葉によって直接に表現されます。詩の本質は歌であるとはよくいわれることであり、また結局において、正しい定義のように思われますが、歌は言葉であるとともに言葉以前の肉声—または叫び声—です、僕等の感動のもっと直接な表現です。／詩はこの肉声に言葉をできるだけ近づける性格を持ち、そのために言語をその日常性社会性からできるだけ解放することを目指します。」

「詩の場合は作者の思想や感情は言葉によって直接に表現されます」は、いかにも楽観的な観察である。では詩は何ものかを直接的に表現した言語だ、ということになるのだが、そんな言語を人類はいまだ持ったことがない。詩もまた通常の言語と同じく、間接的に現実の経験に向かうのである。ただ、中村光夫が「直接に」という意味は、私たちのコミュニケーションに用いられる日常言語の道を通らない、ということを単にオプティミス

ティックに表現したまでのことだ、と考える事も出来る。詩の言葉は、むしろ日常的な無自覚な道を通らないだけ、その繊細な意識の分だけ、余計に混迷の度合いは深いと言わねばならないだろう。

歌と詩を直接的に結びつける思考法も、単純化が甚だしくついて行きにくい。谷川俊太郎は、戦略的な手段として「歌」の方法論を吸収しようとした。そこには「朗読」や「詩劇」といった局面も同時に存在するのだが、彼の場合、詩は決定的に肉声を失っているという認識から出発している。そして現代詩の認識としては、谷川俊太郎に圧倒的に分がある。中村光夫には具体的な経験が不足している、あるいは経験の意識化が不足していると言うべきだろうか。「叫び」や「嘆声」から歌が始まり、詩もそこから分化してくるというのは、あらがいようのない起源論であるけれど、その認識には谷川俊太郎の実践ほどの重みはない。古代や早い時代の古典を折口信夫のように研究する上では意義のある観点だが、現代詩にどれほど有効だろうか。

5

「詩はこの肉声に言葉をできるだけ近づける性格を持ち、そのために言語をその日常性社会性からできるだけ解放することを目指します」

詩は、肉声に向かうのだろうか？　そうではない。経験という言葉の向こう側に向かうのだ。詩の言葉が、日常性や社会性からこぼれ落ちてゆくベクトルを持つ点には、朔太郎も気づいていたことだが、それは、肉声に向かうからなのではない。肉声もまた日常性と社会性にドップリと浸かっているのだから。むしろその肉声に対する震える意識が、詩を更に先へと向かわせているのだ。

これらを吉本隆明はこう理解する。

「ここでは、詩の本質が歌であり、歌は言葉以前の肉声―または叫び声であるという個処に注目したい。ほんとのことを口に出せば世界は凍ってしまうならば、それができない社会では、絶えず、ワァッとかウオウとかいう叫びをこころに禁圧しているとも考えられるからである。」

吉本隆明にとって大事なのは、何かが禁圧されているということ、そしてそれを解放するのが詩だ、という簡単な図式なのである。そのスリットを通り抜けた部分だけが彼の理解へと通じてゆく。それ以外の要素は、彼の目も耳も、もはや何ひとつ受け付けないらしい。

中村光夫と同じ事柄を述べているとして、並べてヴァレリイ「文学論」が引用されている。

「詩は、節調ある言語によって、叫び、涙、愛撫、接吻、歎息等が暗々裡に表現しようとし、また物体がその外見上の生命或いは仮想された意志によって表現したいと思っているらしい、それらのもの、或いはそのものを表現しまたは再現しようとするの試みである。」

始めの部分は確かに似ているが、ヴァレリイは、詩に於いてはトーンやリズムによって詩人の感情が表現されるのだ、と言っている。これを読むと、中村光夫の「言語を肉声に近づける」という言い方がいかに乱暴かがよく分かるのではないか。そして、後半は明らかに別のことを言っている。これは朔太郎が感じ取ったことと同じことだ。詩人は現実に向かうのだ。私たちが持っている言語とは違った文法の支配する、違った語彙の世界へと、つまり物体へと、宇宙へと、私たちの言語を使って向かうのである。

6

続いて引用されるのはマルティン・ハイデッガーの「ヘルダーリンと詩の本質」である。

『人間の現存在はその根底に於て「詩人的」である。ところで詩とは我々の理解するところによれば神々並に事物の本質に建設的に名を賦与することである。詩人として住むとは神々の現在のうちに立ち事物の本質の

近みによって迫られることである。現存在がその根底に於て「詩人的」であるとは、それは同時に現存在が建設せられたもの（根拠づけられたもの）として何らのいさをしではなく賜物であるの謂である。／詩は現存在に随伴する単なる装飾ではなく、またその場限りの感激でも況んやただの熱中でも娯楽でもない。詩は歴史を担う根拠でありそれ故にまた単なる文化現象とかましてや「文化精神」の単なる「表現」などではない。』

現象学的な認識論を背景に持つと思われるハイデッガーのこの一文は、そのスリットを通して読むと割合に理解がし易いように思う。私は現象学の知識をあまり持ち合わせておらず、信頼度は低いのだけれども。竹田青嗣氏の議論を私が理解できた範囲で説明してみる。

現象学は、人間の認識の発端は、人の情動性を外からやって来たものが刺激することから始まるのだ、と理解する。だからその時点では、世界は受動的に始まるのだと言える。最初の人を想像してみよう。彼はどんな予備知識もなく現実に生を受けている。何かが目の前で起きた。たとえば、今言うところの「太陽」が昇った。彼はそれを視覚を通じて見るかもしれない。肌の感覚を通じて知るかもしれない。耳を通じて生き物の鳴き声として聴くかもしれない。鼻から入ってくる空気の変化として感覚するかもしれない。それらの感覚は、すべてやって来たものを契機として起ち上がったものばかりなのである。これらの感覚は人の情動性の動きへと繋がる。なにか爽やかな感じがするかもしれない。空腹感が刺激されるかもしれない。暗闇の不安が薄れて行くかもしれない。何か待っていたことに近づいた喜びが湧き上がるかもしれない。そして次に起こるのは、この感覚と情動性の変化に応じて、言語野を通して事態を認識することと、目的を設定して行動へと移る段階だ。やって来たものに対して、人間は言語野を通してこれを受け止め、言語を使いながら目的論的な世界を構成する。つまり、最初の人を考えると、彼は、自分の情動性の変化を契機として、現実に向かって、「朝」とか「太陽」とか「光」」といった言葉を与え、「さあ、食事だ」とか「今日の仕事はこれこれだ」とか考え始めるわけだ。

7

詩人が言葉によって行おうとしているのはまさにこの最初の発語なのだ。普通、歴史的に積み上げられた世界観や共通言語に頼ることができるから、一つ一つの感覚や情動性の変化に対して、常に新たに言葉を求める必要はない。けれども詩人と言われる人は、その一つ一つのやってきた現実に対して、言語の母体を前提としながらも、更に新たに言葉を付与しようとする。詩人は、今も生きている「最初の人」だ、ということになるのではないか。

ハイデッガーが強調しているのは、「現存在がその根底に於て「詩人的」であるとは、それは同時に現存在が建設せられたもの（根拠づけられたもの）として何らのいさをしではなく賜物であるの謂である。」の部分、能動的に勝ち取った「手柄」＝「いさをし」ではなくて、受け止められたもの＝「賜物」だということ、人間の世界は受動的に始まったものだ、という点だ。

「歴史」という概念は、私には少々難しいのだが、ハイデッガーは、人間を、死と歴史性によって定義しているようだ。終末に訪れる死を覚悟することによって、人は己の可能性を明瞭にして行く。一方、生誕の側を見つめると、人はそこで他の人々との共同の運命の中にその発端から投げ出された存在である。人間は、この両端の間に実存している。共同の運命を負わされている、という一点に人間が歴史的である所以がある。

だから、このことを考えてみると、人間は二重に受動的であり、その故に引き裂かれているのである。一つは事物の側からやってくるものを受け止めて始めて己の世界を持つのだ、という点で。もう一つは常に共同の世界を前提としながら、己の世界を生きねばならない、という点で。そしてその二つの生を同時に生きねばならぬ宿命を担っている。

ハイデッガーの引用文に対する吉本隆明の理解は次の通り。

「現存在が詩人的であるとは、いさをしではなく賜物だ、という言葉や詩は歴史を担う根拠だという言葉はわたしの気に入る。これを、やさしく翻訳すれば、現存する社会に、詩人として、いいかえれば言うべきほんとのことをもって生きるということは、本質的にいえば個々の詩人の恣意ではなく、人間の社会における存在の仕方の本質に由来するものだ、ということになる。これを、わたしのかんがえにひきよせて云いかえれば、わたしたちが現実の社会で、口に出せば全世界が凍ってしまうだろうほんとのことを持つ根拠は、人間の歴史とともに根ぶかい理由をもつものだ、ということに帰する。」

吉本隆明は、ハイデッガーの議論の一切を、人間は社会的存在である、というスリットによってのみ理解しているのだが、詩の言葉を感情出自の言葉として強く思い込んでいる限り、結局はそこへ落ち着いて行かざるを得ないのだろう。つまり先入観が、あるいは強引な思想的略奪への意志が、そう見せているのである。

8

次に、折口信夫「国文学の発生（第一稿）」が引用される。

「一人称式に発想する叙事詩は、神の独り言である。神、人に憑（か）つて、自身の来歴を述べ、種族の歴史・土地の由緒などを陳べる。皆、巫覡（読み：ふげき・かんなぎ）の恍惚時の空想にはすぎない。併し、種族の意向の上に立つての空想である。而も種族の記憶の下積みが、突然復活することもあつた事は、勿論である。其等の「本縁」を語る文章は、勿論巫覡の口を衝いて出る口語文である。さうして其口は十分な律文要素が加つて居た。全体、狂乱時・変態時の心理の表現は、左右相称を保ちながら進む、生活の根本拍子が急迫するからの、律動なのである。神憑りの際の動作を、正気で居ても繰り返す所から、舞踊は生れて来る。此際、神の物語る話は、日常の話とは、様子の変つたものである。神自身から見た一元描写であるから、不自然でも不完全でもあるが、とにかく発想は一人称に依る様になる。」

ここにある一人称というものは、私たちが今書くことの出来る「私」とは異なっている。

「私」には、「私」を拘束するすべての観念、経験、現実にある環境が参加して、それらを順次経巡る道筋の上にあり、更にそれらの道筋である「私」自身について反省する力、つまり対象化する心理も加わって、「私」というものの全体像が形作られているはずである。

しかし、巫覡の一人称は、彼や彼女を成り立たせている自己とは、少しずれた所にその淵源を持つようだ。「神」とここでは言われているが、土地と村が形作るコスモスが、人間に触れようとするところにこの呼び名はあるのだと思われるが、私たちの知っている「詩」とは違って、一人称の主体はこの「神」に預けられるのが古代の叙事詩の手法なのだ。そこには、個というものがまだ編み出されていない古代の文化の性質が表れているのであろうが、この違いは、巫覡の「われ」と、現代詩人の「我」との間にどのような違いをもたらしているかが重要なポイントだ。

今も書いたように、個というものがまだ編み出されていない時代のことであるから、巫覡が言う「われ」が、私たちの知っている「私」であるはずがない。まだ「自己」というものや、その「内面」を言語化する公式な作法は無い時代のことなのである。巫覡が日常生活の中で、自分のささやかな思いを語ることはあったとしても、それが公の場に出てくる機会はない。それはまだ、歴史的には存在していないということだ。「個」というものが、政治的に価値付けられ、利用され、また個々の生の上に於いても活用されるような時代が来るまでは、「個」は語られることはなかったのだと思われる。

9

だから、巫覡の語る一人称は、私たちの知っている「我」ではない。土地と村を包み込むコスモスが、巫覡の感性の中になだれ込んでくるのだ。この一人称は、彼や彼女とは別のもの、普段彼や彼女がそれによって生かされていると感じている強い力そのもの、彼や彼女の恐れや慎み、畏敬の念や喜びの根本にある経験そのものの到来なのである。

だから、こうも言えるかもしれない。古代に於いて「神」と呼ばれていた経験のいくらかの領域については、現在「詩」と呼ばれている経験のある部分と、本質的には同じものだと言って良い、と。

吉本隆明はこの折口信夫の考えを受けて次のように言う。

p23「文学、芸術が人間の意識の自己表現に発したという面を、一貫して立証しているところに、わたしは折口学説の水準を見たいのである。」

この解釈は、「皆、巫覡の恍惚時の空想にはすぎない。併し、種族の意向の上に立つての空想である。而も種族の記憶の下積みが、突然復活することもあつた事は、勿論である。」という箇所の特に「空想」という単語に引かれた解釈なのであろう。けれどもここは同時に「恍惚時の」とか、「種族の意向の上に立つての」といった条件を無視してはならないだろう。これらを飛び越えて「人間の意識の自己表現」とだけ言ったのでは、折口信夫の世界を、現代の通俗的な芸術理解にまで引き下ろしてしまうことになる。これでは吉本隆明自らの手で、「豚に真珠を喰わせ」ているようなものではないか？

この先入観のために、吉本隆明はこんなことを言わざるを得なくなる。

『「神、人に憑(か)つて」ではなく、ほんとうは、人、神に憑いて、種族の共通の意識体験を表現するのである。』

まるで神の名を騙って政治力を奮っている古代の宗教的な専制君主のような人物像を作り出しているが、これは勿論、「神」のイメージよりも、「自己」というものへの信仰が吉本隆明の中で肥大化しているせいであって、そのために折口信夫への理解に歪(ひず)みが生じているのである。

p25「わたしたちが詩の（一般には文学の）形式とかんがえているものの本質は、意識の自発的な表出という断面をさしているが、おそらくこれが折口学説から引きだすことができるもっとも貴重な示唆のひとつである。」

吉本隆明の議論には、どんな出口もない。どんな横道を探し出したとしても、彼は必ず入り口に戻ってしまう。彼の議論は、執念深く一歩も進みたくないかのような進み方をする。彼に言わせれば、すべてが「自己」に戻る道だ。まるでローマ帝国のような帝国主義である。

10

p26「新室(ほかひ)の歌は、其建物の材料とか、建物の周囲の物などを歌ひ込めて行く。而も最初から此を歌はうとして居るのではない。即、茫漠たるものを、まとめるのである。昔の人は、大体の気分があるのみで、何を歌はうといふはつきりした予定が、初めからあるのではない。枕詞･序歌は大抵、目前の物を見つめて居る。／…／即、序歌によつて、自分の感情をまとめて来るのである。予定があつて、序歌が出来たと思ふのは誤りである。でたらめの序歌によつて、自分の思想をまとめて行つた。即、神の告げと同様であつた。」（「万葉集の解題」折口信夫）

折口信夫の引用は刺激的である。古代の人の場合、私たちと決定的に違っていると思われるのは、言語体験が遙かに新鮮で、人の中で言語そのものが生き生きとした力に満ちて蠢いていた、と想像される点だ。これは勝手な想像であろうか。

折口が描き出す叙景歌の誕生場面には、私たちには失われている言語に対する深い信頼が感じられる。と

にもかくにも、まず目に映る物をそのまま言葉に換えてゆくというのである。そうする過程で次第に自分の中にある何ものかが浮かび上がってくる。言葉を唱えると、言葉自体が自由に手を結び合い、自由に手を切り離して、何ものかを探し出すのである。そのことを古代人は知っていて、言葉に任す、言葉に身を預けるように歌うのである。

そのように、言語が強い力を持っていたそもそもの理由は、しかし、言語自体にあるわけではないだろう。古代人の感性が、十全に眼前の現実に向けて目覚めていたから、だから言語に生命が宿っていたのだとは言えないだろうか。言葉の命は現実との接点に由来する。そこから生命を汲み上げる以外に、言葉が生き続ける方法はないのではあるまいか。

11

もう一つ、折口信夫が描く場面は、まだ詩そのものが存在する時代の話ではないように思われる。詩があるためには、言葉の蓄積が絶対的に必要だ。私たちの中に、「文学」とか、「教養」といった言葉の蓄積があって初めて、詩は生まれるのだと私には思われる。それ以前のプリミティブな時代には、もっと何か別のもの、宗教的な言祝(ことほ)ぎの言葉だとか、政治的な宣言のような言葉があったのではないだろうか。

吉本隆明の理解は次の通りだ。

「云われていることは、ふたつにつきる。第一に、古代人の叙景では、対象は選ばれるよりも眼にふれた手近なものがうたわれ、うたわれながら感情をひき出したということである。第二に、このような手近な景物をうたうことが、宗教的自己疎外に似たものであったということである。まずシュルレアリズムとおなじような忘我の状態が触目の景物によって表出され、しだいに芸術的な意識の自己表出となって結晶し、おわるというのが叙事詩の発生についてここで指摘されている意味である。」

吉本隆明の意図はあくまでも［折口学説を意識の自己表現として普遍化すること］であるから、「万葉集解題」のこの部分の理解もその路線でなされている。この箇所については、決して誤った理解であるとは思えないけれども、しかし、私には吉本隆明の意図は、結局のところ折口信夫の学説を陳腐な俗説と変質させているように感じられてならない。折口の言葉の刺激的な部分が、吉本隆明の解説によって切っ先を殺がれ、つまらないものになっているように思えてならない。あまりにも現代的な理解だからだろうか。吉本隆明の解説の中には古代人は居ないで、現代的な感覚の現代人が古代人の格好をして、とんまな表情をして立っているのだ。折口信夫が触れようとして全身全霊を籠めて向かっているのは古代人の世界である。そのことへの敬意が、吉本隆明の中には見られないように思われる。

12

p36「わたしたちは、詩をかくという意識状態がある緊張した放出状態のつづきであることを体験的に知っている。これは、いわば意識をたえず叫びの状態でみたし、言葉をその状態でうら貼りしながら表出していることを意味している。これは、わたしたちが言語をもたず、ただ有節の音声だけしかないとしても表出しなければならないはずの意識の自発的な叫びであり、それは詩が発生のときもっていた初原的な形での芸術だということができる。」

吉本隆明が「意識の自己表現」という言葉に固執する理由がここで明らかになる。彼は、人間の意識が、自発的に叫ぶ力を持つ、と考えている。これは全くの誤りだ。周囲の環境からの刺激無しに、人の意識は存在することすらできない。人間の生も意識も、徹頭徹尾受動的に開始するのだ。敢えて言うならば能動性は無の態

勢で潜在的にしか存在しない。そのレヴェルから言うと、意識はずっと後に出来てくるものであって、それ自体の本質は受動的である。詩は、人間の心のプリミティヴなレヴェルに向かう。言葉が立ち現れる以前の「わたくし」の世界に向かう。そこに「意識の自発的な叫び」を見ようとするのは誤解である。意識は、私たちに共有されている言語を注意深く取り除きながら、「わたくし」の世界に下りて行く道を探る部分で、秘めやかに活動するばかりである。

だから、詩を書いている状態への意識も、吉本隆明の理解は浅い。「詩をかくという意識状態がある緊張した放出状態のつづきである」という理解は、それ自体間違っているとは思わないけれども、吉本隆明はこれを、能動的、自発的放出状態としてのみ理解しているのである。彼は、彼の周囲で何かが起きたために、そして何かが想起されたがために、この放出状態が始まったのだということに気がつかない。

この無理解はしかし、致命的な誤謬だと思われる。詩を、詩人の内面の閉ざされた領域に決定的に隔離したのは、まさにこの〔自発的な契機〕という認識ではなかっただろうか。個々の詩人の内面に閉ざされた詩は、このあと〔社会〕との抽象的な関わりを残し、周囲の世界と連絡する方途を失うことになる。現代詩の不感症はここに於いて決定的な始まりを迎えたのであり、現代詩の孤立もまたここに起点を持つのだと思われる。

13

「作詩過程にあっては、言語は、詩人の強烈な精神状態に応じて、同じくらい明確な力を持つ独立した客観的な“もの”として、意識にのぼってくるのである。」（ハーバード・リイド『現代詩論』和田徹三訳）

「詩的態度とは言葉を徴（シーニュ）としてではなく、ものとして考えることである。」（サルトル「書くとはどういうことか」加藤周一訳）

次にこの二者の引用について考えてみたい。ソシュール以降、言語が人文科学的な分析的な意識の対象となった。それはもう人間と一体になったまま、人間のア・プリオリであることをやめるのである。この対象化する眼差しに寄り添うようにして、文学を芸術作品として新たに捉え直す動きが生じたのではなかったか。文学を、絵画や美術品のように見ようとする動きだ。「もの」として、つまり意味を剥奪された存在に還元してみる、そうすることで、文学を人間の思考から、一旦切り離して見直すのである。そこに芸術作品としての文学の横顔が見えるのではないか。

確かに、詩は、私たちの日常言語からかけ離れた言葉だ。その故に、「もの」として、意味作用を一旦剥奪した姿で見ることは、その存在様式に見合っているように見える。詩は美術品や絵画の持つ沈黙と、極めて類似した印象を与えることもある。けれども現実には、意味作用を持たずに詩句が生じてくる、ということはあり得ない。一見意味作用を踏み外したところにあるかのような言葉も、あくまでも私たちの日常的な言語の意味作用の慣習から外れてしまっている、ということにすぎない。「もの」であるかのような強い拒絶の意志も、別種の意味作用の持つハレーションが見せた幻影にすぎない。よい詩句とは常にそういうものではないだろうか。

14

この二者の主張に対して、吉本隆明は別種の反論を試みている。

p37『しかし、詩において言語は「もの」としてあるのでもなければ、「徴（シーニュ）」としてあるのでもない。詩をかくとき言語は意識の自己表出の頂きで指示性をもつのである。たとえば「海」という言葉は、意識の自発的な表出力によって花火のように打ち上げられ、その頂ではじめてあの青い水をたたえた「海」を象徴的に指示する。頂きに打ち上げられるまでは「海」という言葉は、初原的な叫びとおなじ塊りであるにすぎない。』

吉本隆明は叫びの持つ「放出した感じを重視し、その一点に詩の価値を見出している。「自己が自己に憑いた感じ」という言い方もそうだが、吉本隆明の議論はこの点で一貫していて、あくまでも自発的な自己放出に意味と価値を見出すのである。

吉本隆明が還元している「自己」とは、しかし「ほんとのことを云えば世界は凍ってしまうというあの定常的な精神状態」に包含されている。つまり疎外され、自閉した自己なのである。

この部分に吉本隆明の議論のネックが感じられる。この先入観さえなければあるいは、あの「自己放出」の感じも、感性のリセットがもたらした感覚、と意識されていたかもしれない。この点がクリアされていれば、「現実の世界では、わたしたちは社会的なコミュニケーションの必要から言葉をつかっている。…（もちろん、このばあいでも、言葉は意識の自己表出にうら貼りされているのだが）。詩のばあいには、言葉は意識の自発的な放出で、あるいはその感じで表現される。もちろんこのばあいでも、コミュニケーションの必要、ある事物を指したいという必要はうら貼りされているのである。」などといった、奇妙な解説はせずに済んだであろう。（どちらも互いに裏貼りされている同士なら、いったい違いはどこにあるのだろうか？）

15

p45「現実の社会で交通の必要からとびかわされる生活語の世界を第一の現実とすれば、散文芸術の世界は第二の想像的な現実であり、詩の世界は第三の想像的な根元であり、詩をかくということはこの第一の現実において、第三の想像的な根元、自己が自己に憑く状態に励起されることである。」

まずこの第一、第二、第三の項目の立て方に疑問を感じる。現実を主とするのは常識的で信頼に足ると言えるけれども、問題が言語であるからには違ったアプローチの仕方が必要となるだろう。ハイデッガーに学ぶならば、第一に設定されるのは詩の言語だ。詩の言語はプリミティヴな言語活動への自己解放であるはずだ。詩は感性の最初の震えを捉える言語活動だ。吉本隆明は「想像的な根元」と言いながら、「現実」に対して下位に置くが、人間の世界は本質的に幻想的な世界なのであるから、第一の現実との対比でこのように言うのは、そもそもおかしな事と言わねばならない。詩の言語が日常言語から遠く隔たっていると感じられるのは、人間世界の幻想性が詩の上で純粋な姿となって露出しているからに他ならない。私たちの日常的な目の方が、通常現実の本質からは遠く背けられている、ということなのである。

詩は、私たちの安住する世界の「安定性」の根元を照らし出す言葉だ。その意味でのみ吉本隆明の詩句「世界を凍らせる言葉」は価値を持ち得るだろう。ただし、「凍らせる」と言うよりも、世界の安定性との間で響き渡るとでも言い直した方が、より穏当な言い方になるのではあるまいか。

吉本隆明の言う「第二の想像的な現実」である散文芸術という項目についても、現実が幻想的世界であると考える以上、同語反復であり、そもそも項目として成立しないということになろう。散文芸術は、例えば小説の場合は物語性を担うけれども、この経験の本質は、現実の幻想性をなぞろうとするところにある。論理的に構成された散文、例えば哲学論文や人文科学系の論文などが日常的世界の幻想性を補強し修正する方向で働くのに対して、散文芸術の働きは、現実の幻想性そのものを照射しようとするのである。その根底には「詩的態度」と同じものがあると考えて良い。

結局、幻想的現実という意識から最も遠いのが「生活語の世界」である。無自覚で、私たちが生きている現実の本質からは最も遠い、互助会のような安穏な世界である。

谷川俊太郎は詩と散文という問題の立て方よりも、論理的言語と文学的言語という問題の立て方の方が有効だと言っているが、その通りかもしれない。

16

吉本隆明の項目の立て方は、元々無理な方法をとっているが、その不整合をどのように修正しているかを見てみる。

詩について彼はこう言う。

p43「書き言葉におけるまだ熟していない言語は、いつも意識の指示性からも自己表出からも励起された状態をともなう。この励起された意識状態の表現は不安定であり、ある完結性をもつ。そして定常的な意識からはじまって励起された状態から衰退をへて定常的な状態への復帰までの表現を詩とよぶことができる。」

つまりそこに「意識の」「励起された状態」を見出されることで初めて詩が詩になる、と考えるわけだ。これに対して散文芸術には「突発的な高揚が挿まれているばあいでも定常性にかえらなければならないし、かえることができる」とするのである。「自己」というこの概念の存在様態に還元することで、詩と散文は区分可能となるわけだ。これを見ても吉本隆明の議論の要が「自己」という概念であることは明白であり、これが彼の思想の閉鎖性と観念性の根源になっているのである。このことは、p44「芸術の価値は、意識の自己表出のインテグレーションにほかならない」という言い方にも現れている。いったい「意識の自己表出のインテグレーション」とは何か？　それはどのように見分けられ、どのように計量できるのか。「源氏物語」の「帚木」の巻と「桐壺」の巻との「インテグレーション」の差とはどのようなものか。藤村の「草枕」と光太郎の「レモン哀歌」にはどれほどの「インテグレーション」の差異があるのか。これらの問いに対していったい誰が答えられるというのだろうか。そんな計算式は立てようがない。かつて計算されたこともないし、これからもないだろう。この定義には、議論を「自己」に還元するための観念的な誤差補正の働きはあるとしても、実質的な意味がほとんど無いのである。

17

折口信夫の「古代研究」(全集第一巻) からの引用。

「つまり、かう言ふ傾向から、日本人の歌に、譬喩が生まれて来る。全く<u>でたらめ</u>に、そこにある物を捉へて詠む、と言ふ処から、「<ruby>唇<rt>クチ</rt></ruby>ひゞく」☆　の様な形が、出来て来るのである。」　☆唇が(<ruby>檜<rt>はじかみ</rt></ruby>＝しょうが　を食べると) ぴりぴりする…ことを忘れない。

P49「詩的な喩の本質が、でたらめに歌われた手近な対象のうちから、ある述意にたいする意味的なまたは像的な当りに起源をもつということができそうにおもわれる。そして、この当りの意味や像は、歌われ、またはかかれた詩が励起された意識の交響する言葉として表現されるということのなかにはじめてあらわれる。」

P50「詩の喩は、詩の価値をたかめるための言葉の当りであり、いいかえれば意識の自己表出をたすけるもの、また自己表出そのものの原型である。」

折口信夫の「でたらめ」という言い方は、あまりにも常識的言語活動の側に重心を取りすぎていないだろうか。折口信夫は古代の文化的標準の再現という仕事において、大変な天才を発揮した学者である。それだけに、その標準を明らかに外れている領域の評価において、やや常識的な物の言い方をした、ということはないだろうか。人の目の前には、現実は常に重層的に現れている。それは、私たちの意識や感覚や記憶の交響楽的構成物なのである。だから、ある一つの出来事に向き合おうとしても、私たちの世界理解は、決して単一化することがない。私たちの現実である共有された幻想的世界は、本質的に重層的に感じ取られ、作り上げられている。詩は、「わたくし」の最初の感覚に下りて行きながら、その基底部に於いて世界の重層性に触れざるを得ない。詩が、私たちの常識的で、穏当な、一見生きやすく一様に踏み固められている現実のレヴェルの中

へ、それとは全く異質な文法や語法や比喩らしきものを混入させるのには、それなりの理由があるのだ。

18

でたらめのようでいて、それは決してでたらめではなく、確かに真実感じ取られており、それは詩人が向き合っている現実の経験の中で、他の構成要素との間で本当に響き合い、引き合い、互いに退け合うような関係性を持つと感じられているのである。この重層性の発見がまた、私たちの常識的で鈍重な言語活動の内部に、新鮮な空気を送り込み、両者の間に豊かな共鳴空間を作り出す源ともなるのである。

比喩という命名と定義もまた、私には常識的言語活動に重心を置いた視点で語られているのだと感じられる。

直喩には、日常的な言語活動への繊細な配慮が働いている。隠喩には、日常言語に背を向けて、感性が眼前にしてるものに向き合おうとする意志が感じられる。それぞれがどれほど成功するかは別の問題であるけれども、いずれにせよ比喩において賭けられているのは、現実からやって来るものを、いかにして言語化するかというプリミティブで繊細な配慮である。だから比喩は、本来は「これは何々の比喩である」と言って済むものではない。「何々」と名付けられない、何ものかへの命名の決断が比喩の本質でなければならないだろう。そうでなければ、詩にどんな価値もありはしないだろう。

吉本隆明は、北村太郎、加島祥造両氏の「詩の定義」を批判しているが、この批判には私も同感できる。また、P56「詩のかなめに詩的喩があり」という直感も支持できる。しかし一方では、比喩に頼らない書き方もまた可能なのだということを、谷川俊太郎の試みによって教えられもするのである。

さて、比喩を巡っても、吉本隆明は「自己」という壁を配置して、詩の世界に閉鎖性を持ち込んでしまう。本来、比喩とはどれほど可能性に満ちた営みであるか、ということを是非とも思い出してもらいたい。そうするならば、比喩が「自己表出そのものの原型」といった小さな領域で語られ得るものではないことを十分に理解できるはずなのである。比喩は「自己」を超えるのだ。常識的で物わかり良く、時にわがままでケチな精神でもある「自己」、「あなた」の前で、「あなた」との関係性の一翼を担う存在として成立する「私」を、比喩は両者の「共有」から逸脱することにより、もう一度リセットし、「わたくし」という経験の根源を照らし出すのだ。詩を経験するということは、自己を一度失うということである。それほどの衝撃力を詩的体験は持ち得るはずなのだ。そうではないだろうか？

19

p58『わたしが、いままで詩的な喩として言語のうえからのべてきたところは、この「永久」的な現実の抑圧と、詩の一時的な解放との結び目をとめるクサビのようなものである。』

吉本隆明の誤解は二つある。現実の抑圧は永久的なものではない。現実という世界像は変わり得る。これまでも次々とその様相を変えてきたし、これからもそうだろう。「　」が付いているのは、「永久」と感じられる、という意味だろうか。そう言い直したとしても誤解であることには変わりはないし、ただ主観的表現を混入させたことで、寧ろずっと悪い。二つ目は、詩がこの抑圧に関わり、そこから人を一時的に解放する、という点だ。詩は、抑圧と関わっているわけではない。それは現実の幻想性を照し出し、現実をより豊かなものにする。現実の中にある人に鮮烈な感覚を蘇らせはする。それを抑圧からの解放という言葉を使って表そうとしている、と百歩譲ってみても、文脈を読み誤っている点をどうすることも出来ない。この誤解もまた、吉本隆明の先入観がもたらしたものだ。吉本隆明は己の経験の大雑把な把握から出発しているために、誤差がどうしても大きく出てし

まうのだ。

けれども吉本隆明は、詩を書くという経験が、現実の幻想性を照射するものだ、ということに気付いてはいるのだ。彼の詩句、「世界を凍らせる言葉」がその証拠だ。しかし、彼はそれを現実の何らかの部分と自己との力関係へと還元して理解しようとした。吉本隆明に現象学のほんの僅かな思考原理が備わっていたなら、全く違った詩論を書いていたに違いない。

20

「古代人はかれらがかれら以外のものでありうることを妄想したとき、それが何であるかをさぐり当てるところに詩的な喩を発生させた。わたしたちは、いま、わたしたちがわたしたちであり得る方法を、わたしたちがわたしたちでない現実社会のなかで妄想するときに、詩的な喩の全価値にたどりつく。」

なぜ詩が生活思想に従属しなければならないのだろう。なぜ古代人まで現代詩の詩人たちのように生きなければならないと考えるのか。自己の存在や思考の仕方を反省し、違う生き方、違う考え方を求めようなどと、古代人がどうして考えると思うのだろう。古代人は、遙かに直接的に現実と向き合っていた。自分の感性や経験に、じっと耳を澄ませ、余計な妄想に振り回されることなく、言葉と現実の向こうから、幾度も繰り返しやって来るものに耳を傾ける。その響きを、言葉で捉えているのである。それは今でもなお、詩人たちのテーマであるはずだ。

それは多分、当時は自然の力が圧倒的に大きく、人間の力、文明の力がまださほど強力ではなかったから、自分の生の受動性に気付きやすい環境を生きていたから可能だったのかもしれない。今はそれが比較的難しくなっているのかもしれない。

ところが私たちは、現実の世界で寧ろ思うままに生きていると錯覚している。抽象的な世界の論理にどっぷりと浸かり、自分たちの本質的な受動性にはかけらも気づく事がない。せいぜいのところ、抽象的な現実の意のままになっているのではないかと、疑問を感じるのが関の山であろう。私たちの生はこうして、いつでも窒息の危険に直面していると言って良い。

けれども本当はそうではない。私たちが浸かっている現実さえも、どんどん受動的に移り変わっていこうとしている。その背後には、鮮烈なものがあって、そこから古くて新しいものが次々とやって来つつある。その声に、耳を澄ませたとき、詩が成るのだ。詩人の声の向こうには、現実の背後にあるはずの何か見知らぬもの、新しいもの、美しいものが、潜み隠れている。それに耳を傾ける事は、私たちが「わたくし」の受け身の生にもう一度立ち戻る事だ。私たちが、私たちの生を、「わたくし」の経験を通して、より新鮮なものにする事であるはずだ。生をもっと力強くする事、生をもっとかぐわしくする事、ここにこそ、詩の本質的な価値があるのだと私は思うのである。